
手品師の姪

沖川 英子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手品師の姪

【Zコード】

N8171P

【作者名】

沖川 英子

【あらすじ】

ある街でマジックバーを営む中年手品師のキセ氏の元へ、ある日突然押しかけてきた姪。

久々の再会を喜んだのもつかの間、彼女は店で働きたいと言い出した。

キセ氏は彼女を雇うことにして、共に店を切り盛りしていくのだが……

誰かに職業を訊かれると、キセ氏は必ず、「人を騙す仕事です」と言う。

言われた方はたいていの場合キセ氏が冗談を言つてはいると思つて笑うか、真意を汲み取りかねて曖昧に笑うか、まじまじと彼の顔を見る。たまに真顔で詐欺師ですかと問う人もいる。

「ああ、マジシャンですか」

と頷いてくれるのは、ごく一部の勘の冴えた人だけだ。

分からぬ人には自分から正体を明かすが、キセ氏はいつも、「手品師です」

と控えめに言う事にしていた。「マジシャン」なんて呼び名、まるでホテルのステージや洒落たホールで大掛かりなイリュージョンを行うみたいじゃないか。キセ氏は大仕掛けは得意ではない。彼は、小さなボールを手のひらから貫通させたり、机の上のコインを瞬間移動させたりといった、ささやかだけれど摩訶不思議なマジック、「クロースアップ」と呼ばれるものが好きだった。

遠くになだらかな山々が青く霞む町の、繁華街の外れ。古いビルの4階にキセ氏の店はある。5席のカウンターと3つのテーブル席がひしめく小さなバーはひとつそりと物静かな佇まいで、キセ氏の人柄をそのまま反映したかのようだ。

来店するお客様のほとんどは常連で、同じ面子がしそつちゅう集まつては、狭いカウンター席に肩を寄せ合い、ウイスキーを舐めながら低い声でぼそぼそ喋っている。その様を見て、

「秘密結社みたい」

と言つたのはメイコさんだ。曰く、いつも同じメンバーで集まり、狭く薄暗い店の中でもそもそもしているあたりが、レジスタンスとか地下組織といった「何かイワクありげな感じの集会」に見えるの

だといつ。なるほど上手いことを書つものだと、キセ氏はメイコさんのセンスに感じ入つたものである。

メイコさん、といつのは本当の名前ではない。彼女が初めてカウンターの中に現れた時、キセ氏が、

「私の姪です」

と彼女を紹介したことから、姪御さん、姪っ子さん、メイコさんと呼ばれるようになつたのだ。瘦せ面で垂れ下がつた眉に象を思わせる瞳のキセ氏と、すつと通つた鼻筋にくつきり一重の力強い目を持つメイコさんという取り合わせは、それからこの店のおなじみの光景となつた。メイコさんの初登場からもうすぐ1年が経とうという今では、彼女は一端のバーテンダーとして銀色のショイカーを振るつている。

キセ氏の店の売りはもちろん、主人による手品だ。単なるトランプやどこにでもあるタバコが、キセ氏の手にかかるばたちまち魔術をかけられた道具になる。選んだトランプは自動的に選び主の手中に帰り、タバコはどんどん増えていく。借りたお札が宙に浮き、小さなコインは手のひらにつぱいに巨大化する。

ほろ酔いのお客相手に生み出される奇跡を、メイコさんは美しい瞳を見開いてじつと見つめる。時には力が入りすぎて眉間にしわができることがある。

メイコさんは、キセ氏の弟子なのだ。

正確には、押しかけ弟子と言つた方がいいかも知れない。

マイロさんは、ある日突然キセ氏の生活の中に入り込んできた。猫のように音も立てずといふのではない、空からドン、と降つてきたかのような、キセ氏にとつては衝撃的な登場だった。

その日、蒸し暑い町を冷やすように雨が降つた夏の夕方、キセ氏は潤んだ空氣の中をいつものように店に行き、扉を開け、汗をかき掃除をして開店の準備をした。定刻に店を開けて、閑古鳥の鳴く中、新しい手品の練習をしていくとインター ホンが鳴つた。（キセ氏の店は扉に仕掛けがしてあって、見破らないと入店できないのだ。分からなければ、インター ホンを押すとキセ氏が開け方を教えてくれる）

「すみません、開かないんですけど」

凛とした声が聞こえて、キセ氏はおや、と独り呟いた。若い女性が来るなんて珍しいこともあるものだ。こここの客は、常連の物好きな親父たちか、彼らの連れてくるこれまで物好きな親父しかいないのに。

初来店の客に、キセ氏は丁寧に扉の開け方を教えた。仕掛けをなんとか解いて入ってきた姿を見て、キセ氏は再びおや、と呟く代わりに少しだけ眉を上げた。

声から想像した通り、立ち姿の美しい女性だった。背筋はしゃっきりと伸び、目は店内を物色するでもなくまっすぐこちらを見ている。涼しげな淡いブルーのブラウスとパンツというシンプルな出で立ちなのに、彼女の周りだけが明るく見える。キセ氏と目が合うと、大きめの唇には鮮やかな笑みが浮かんだ。扉を開けたまま、彼女はよく通る声で言った。

「お久しぶりです、叔父さん」

ずいぶんと間抜けな顔をしていたのだろう、キセ氏を見ながら彼

女はふふっと笑つた。若い娘に相応しい華やかな表情に、思わずキセ氏の口元もほころんだ。

どうぞ、と案内され、彼女はカウンターに座る。メニューを差し出すと、少しへページをめくつてカシスオレンジを注文した。キセ氏は頷いて背後のボトルを取つた。

「何年ぶりでしょうね、こうしてお会いするの。ずいぶんご無沙汰しちゃつて」

長い髪を後ろに追いやりながら彼女は笑う。キセ氏も笑いながら頷き、氷を入れたグラスにカシスリキュー尔を注ぐ。返事はしなかつた。彼女の親しげな口調の中にある他人行儀な丁寧さが、口を開け難くしていた。無言のままオレンジジュースを注ぎ、コーススターと共にすっと差し出す。

ありがとうござります、と呴いて彼女は一口呑んだ。しばらく、どちらも目も合わさず、何も喋らなかつた。さわいちない空氣の中、ジヤズのCDが控えめに流れている。

無理もない、とキセ氏は胸中で呴いた。何しろ、最後に姪に会つたのは、まだ両手で彼女の歳を数えられた頃なのだ。目の前の女性は、咎められずに酒を飲める歳になつてから何回か誕生日を迎えているだろう。もう20年近く顔を見ていないことになるのだ。どんな風に話していいのかまったく分からぬ。

少しためらつて、キセ氏は口を開いた。

「兄貴は相変わらず？」

カシスオレンジに視線を落としていた彼女はぱつと顔を上げた。真ん中で両分けにした髪が目にかかるのをつむたそとに払いながら、

「ええ」

と苦笑する。兄貴、と口にした瞬間、20年近く前に絶縁した兄の顔を久しぶりに思い出した。あの頃はまだ若かった兄も、今頃は頑固なしわを顔に刻んだ中年男になつているのだろう。そう思うと胸に苦い記憶が甦つた。

キセ氏の兄は眞面目すぎるほどの大眞面目、曲がったことを嫌う

頑固一徹な男で、一回り近く歳の離れたキセ氏にとっては頭の上がらない存在だった。宿題をサボれば容赦なく鉄拳が飛んだし、嘘をつけば頬を叩かれた。キセ氏が15の歳に父親を亡くしてからはその厳しさに磨きがかかり、何かにつけ窮屈な思いをしたものである。

そんな兄だから、キセ氏が手品の道に進むと決めた時には大騒ぎになつた。まつとうな勤めに出ない上に入様を騙す輩になるとはどういうつもりかと、兄嫁の静止を振り払つてキセ氏の胸倉を掴み怒鳴りつけたのだ。怒髪天をつくとはまさにこの事かという怒り様で、キセ氏は兄の罵倒を受けながらも密かに仁王像を思い出したくらいだ。

兄を酷く怒らせながらも、キセ氏は結局、自分の行きたい道に進むことにした。激怒した兄からは絶縁を言い渡され、キセ氏は故郷を後にした。

それを最後に、キセ氏は兄にも、その家族にも会つていらない。

「急に叔父さんに会つちやいけないって怒られて、私、とても悲しかつたです」

目の前で懐かしそうに笑う女性には、遠い昔に幾度も手品を見せてやつた少女の面影は無い。

20年とはかくも長いものかと、キセ氏は改めて過ぎ去つた年月を思つた。

「すまなかつたね」

「いいえ」

首を振り、彼女は氷の溶け始めたカクテルを飲む。その所作を見ながら、キセ氏は何気なく言つた。

「よくここがわかつたね。見つけづらかつただろ」

問には答えず、彼女はグラスからすっと口を離し、キセ氏の目をじつと見つめ静かに笑つた。その秘密めいた視線に妙にぞざまきしてしまい、キセ氏は慌てて目をそらす。そのついでに、「そうだ、これ、覚えているかな」

自分から話もそらしてしまつた。

キセ氏はジョーカーを抜き絵柄の面を上にしたトランプを、片手できれいな扇状に並べる。その中から一枚選ぶように促すと、彼女はさして迷うでもなくぱっと無造作に一枚引き抜いた。

「スペードの5だね

「ええ」

「覚えたなら、この中の好きなところに差し込んで」

キセ氏の手の中では、先ほど広げたトランプが裏向きにきれいに重ねられ、整えられている。

その中ほどに、スペードの5がすっと差し込まれる。

キセ氏はトランプを二つに割つて重ね、また二つに割つて重ね、と素早い手つきで幾度もシャッフルし、右手にトランプを持つ。手に少し力を入れると、52枚のカードは小鳥が羽ばたくように、音を立てて左手に飛んだ。彼女は目を丸くして、鮮やかなそのカード捌きを見ていた。

再びトランプを整え、キセ氏は一番上のカードをひっくり返す。その絵柄はダイヤのクイーンだ。キセ氏はおや、と眉を上げる。

「女王陛下に気兼ねしているのかな」

キセ氏はパチン、と軽やかに指を鳴らす。

「まあ、一番上のカードを取つてみて」

彼女は言われるままにカードを取り、表に向けた。

「あっ！」

アーモンド形の目が大きく見開かれた。細い指は、スペードの5を摘んでいた。

「何で、どうしてカードが上がってきたの？」

20年近くの時を戻したような表情に、キセ氏は思わず微笑んだ。

「子供の頃、あんなに見せたじやないか

「不思議なものは不思議なんです」

何で、何で、とスペードの5をまじまじ見つめる瞳からは先ほどの秘密めいた色がすっかり消え、子供のよつた無邪氣な驚きが現れている。

トランプを使う手品はキセ氏の得意中の得意だった。節くれだつた指を駆使してのカード捌きは滑らかで隙がなく、タネの分かつている手品師仲間でも見とれるほどだ。キセ氏のカードマジックを見たいがために、通いつめる常連客も多かった。

けれど、最初にして最も熱心な観客だったのは、他でもない幼い頃の姪だ。キセ氏を慕い幾度も手品をせがむ彼女を驚かせ、喜ばせたいがため、若かったキセ氏は必死になつて腕を磨いたのだった。

「でも、意外だつたな」

「え？」

カードを整え片付けながらキセ氏は笑い混じりに言った。

「昔、カードを使う手品をやると、お前はいつもハートのフを選んでただろ？おかげでこつちは楽だつたけれど。今回は選ばなかつたんだ」

「それは…」

彼女は言葉を捜すようにわずかに目を泳がせ、一瞬の後に、にっこり微笑んだ。

「それは、私も大人になつたつてことですよ」

キセ氏は静かに頷き、それ以上は何も言わなかつた。

一つの手品をきつかけに固かつた空気がほどけ、彼女は長い空白の時間を埋めるように近況について語り始めた。

地元でトップの進学校を卒業し名のある大学に通つたこと。その間にいくつかの恋愛をしたこと。つい最近会社を辞め、今は求職中であるということ。

薄暗い店内を華やかに彩る笑顔を見つめながら、キセ氏はただうんうんと頷きながら聞き役に徹していた。余計な口を挟んで話の流れを止めたくなかった。

一通り話が済むと、彼女は残り少なくなつていたカクテルをぐつと飲み干し、グラスを置いて手を組んだ。沈黙の中、キセ氏はそつとグラスを下げる。と、美しく彩られた指先が落ち着かなく動いて

いるのが見えた。

キセ氏は彼女の顔を見た。

俯き加減の瞳が落ち着きなくつむつしている。

やがて、決心するかのように両手をぎゅっと組み合わせると、「あの」

彼女は顔を上げた。真剣な眼差しがキセ氏を捕らえた。

「叔父さん、お願ひがあるんです」

すっと大きく息を吸う。

「私を、雇つてもらえませんか?」

キセ氏が黙り込んだのは返事をしかねたからではない。突拍子もない申し出に驚き、声が出なかつたのだ。

「急に、どうして……」

目をぱちぱちしながらやつとのことで言葉を搾り出す。だが、突然の申し出に慌てる一方で、

「大丈夫なの?」

と問うだけの冷静さも持つていた。

キセ氏の店と兄一家の家はかなり離れており、特急を使ってやつと日帰りできるかどうかといったところだ。毎日行き来するには相当な時間と費用がかかるし、ましてや夜の仕事となれば当然終電はない。あの頑固な兄が朝帰りを許すとは到底思えない。

そしてそれ以前に、大事な一人娘が絶縁した弟の下で働くなど、兄が承知するはずもない。

この問題について訊くと、彼女は上目遣いに苦笑した。

「それが……実は、私、家出しちゃつたんです」

キセ氏は返事をする代わりにぽかんと口を開けた。

父親と折り合いが悪いのだと、彼女は打ち明けた。何かにつけ厳しくあたる父親と馬が合わず、これまで二人は事ある毎に反発し合い、壮絶な争いを繰り広げて來たらしい。先日彼女が退職した折にも大きく衝突し、親子の間の亀裂はついに修復不可能なほどに広がつたのだという。

「そのうち家を出ようと思つていたところなので、一度いいやつて、飛び出してきちゃつたんです」

言いながら、彼女はいたずらっ子のよつに笑つた。

実家を飛び出してせいせいしたものの、さてどうしようかと考えた途端、彼女は行く当てが無いことに気づいた。実家の近郊では何かの拍子に父親に居場所が知られかねないし、かといって全く縁故のいない土地に行つても途方に暮れるだけだ。そこで思い出したのが、キセ氏だったのだという。

「叔父さんがこの辺りでお店をやつているらしいこと、聞いていました。ずいぶん昔のことだから、もう引っ越しちゃつてるかもしれませんくて不安でしたけど。でも、ちゃんと会えましたね」

微笑む彼女を見ながら、そういえば、とキセ氏はやつと思い出した。確か、10年ほど前にこの店を開いたとき、世話になった兄嫁に宛ててダイレクトメールを送ったのだ。自分が元気でやつていることも伝えたかったし、もしや彼女が兄との間を取り持つてはくれまいかとも期待していた。

結局、彼らが来店することは無かつた。少し落胆はしたもの、そんなものだと思い直し、いつしかキセ氏は手紙を出したことすら忘れてしまつていた。

だが、その時投じた一石はこんな思いもよらぬ形で返ってきたのだ。

キセ氏の中に温かいものが広がつた。長年のしこりが、ほんの少しだけほぐれたように思えた。

「分かつた」

キセ氏は彼女を雇うこととした。個人で細々と経営しているバーではあるが、従業員一人分の給料を支払えるだけの売り上げはある。もしかすると、新たな仕事を見つけるまでのつなぎで働きたいだけなのかも知れないが、それならそれで良いとも思つた。

キセ氏の言葉に、彼女の顔はぱつと輝いた。

「やつたあ！」

と大人らしからぬ口調ではしゃぎ、ありがとうござります、と何度も口にする。その様子を笑顔で見守っていたキセ氏は、しばらくして、

「ただし」と咳払いをした。

「雇つてもいいけど、守つて欲しいことがある」

真面目ぶつた口調で言つと、彼女も背筋を伸ばし、雇用成立の宣言にほつと緩んだ顔を引き締めてキセ氏を見る。

厳かに、キセ氏は彼女の目を見ながら言つた。

「一つ、良きバー・テンダーたるべく、努力すること。二つ、良き手品師たるべく、努力すること。以上」

「……それだけ?」

バーの主は重々しく頷く。なんだ、と拍子抜けして、彼女は姿勢を崩した。

「そんなの分かつてますよ。こゝ、マジックバーなんでしょう?お酒が作れて、マジックができるきやいけないって事くらい、私だけ知つてます」

子供のように口を尖らす彼女に、キセ氏は穏やかに言つ。

「そうは言つてもね、この二つは基本だからね」

「はあーい

ふてくされたようになつたが、次の瞬間に彼女の口には抑えきれない笑みが浮かんでいた。

給料や待遇等について簡単に話を決め、互いの承諾が取れたところで、キセ氏は彼女にカクテルのお代わりを、自分にウイスキーの水割りを作つた。

「じゃあ、これからよろしく」「いらっしゃい、よろしくお願ひします

『乾杯』

最初の一口を、一人してぐつとある。乾杯でいきなりグラスの4分の1を飲み干し、彼女は猫のように皿を細めて満足げに息をつい

た。

「でも、叔父さん」

「うん?」

カラカラとグラスを揺らしながら、彼女はカウンター越しにキセ氏に問う。

「良きバー・テンダーフィッシュの何となく想像できますけど、良き手品師って、どういうこと?」

「そうだなあ、色々あるけれど……」

キセ氏はしばし空を見つめ、合点したように頷くと柔らかな眼差しを彼女に向けた。

「相手を気持ちよく騙す、ということかな」

沈黙が訪れた。

だが、それもほんの一瞬のことで、すぐに彼女の朗らかな笑い声が静かなバーに華やかに響いた。

キセ氏は幾度も頷きながら、穏やかに微笑んでいた。

「ハしてメイコさんはこの小さなバーで働くことになったのだった。

押しかけるように従業員兼弟子となつたメイコさんだが、本人曰く「学生時代にバーでアルバイトをしていた」とことで、バー・テンダーとしての基本的な技術はしつかり身についていた。

口の悪い常連客など、

「キセさんより、メイコさんがバー・テンダーって感じだなあ」などとからかうほどだ。

確かに、キセ氏はお酒に関する覚えが悪く、複雑なレシピとなると「えーっと…」と小声で咳きながらキュールボトルを探す始末だった。

けれど、そもそもこの店では、カクテルの注文 자체がほとんど無いのだから仕方がない。店に来る客の9割は常連客、そして彼らの注文の9割強がウイスキーで、違いといえば銘柄と飲み方だけなのだ。そのかわり、キセ氏は氷や水にはこだわっていたし、ロック用の丸氷を作るのは大得意だった。

メイコさんは、初日からとても入りたてとは思えない堂々たる動きと接客を見せ、「知らない女がいるぞ」といつも常連客の無言の緊張を解きほぐした。それだけでなく、メニューに無い注文にも即座に応えてみせたので、キセ氏は密かに舌を巻いた。「良きバー・テンダーたるべく、努力すること」などと偉そうに訓示を垂れたのが恥ずかしいくらいだ。

メイコさんの動作は水が流れるように滑らかで、無駄なくぴしっと決まっている。本人もお酒の腕を磨くのは楽しいようで、レシピ本やバー関連の本を買ってきては熟読し、技術の習得に勤しんでいた。

元々ウイスキーやバー・ボンが中心でカクテルは申し訳程度だったメニュー・ブックは、メイコさんが勤務を重ねることに分厚くなり、常連以外の客層も少しだが増えつつあった。まだ採用には至らない

ものの、オリジナルカクテルもいくつか創作されており、店の田玉が増える日も近いのではとキセ氏は期待している。

キセ氏の店がそれまでの「手品8割、バー2割」という状況から何とか「手品とバーが半々」というところまで漕ぎ付けられたのは、メイコさんのおかげだ。キセ氏は彼女に深く感謝していた。

一方でなかなか進展しないのが手品の腕で、こちらに関するてはメイコさんは専らアシスタントに徹し、キセ氏の手から生み出される奇跡の数々に、お客と一緒になつて驚く具合だった。

「まあ、いきなりはできないさ」

練習が上手くいかずメイコさんが落ち込むたびに、キセ氏は言った。

「たつた数回で覚えられたら、私の立場が無いしね」

「そうですが、手品師の姪としてこれはまずいでしょ」

言つてトランプをシャッフルする傍から一枚、2枚とカードが落ちて行く、といった状態で、基本からなかなか進歩しない。だが、空いた時間にトランプをいじつてみたり、コインを手の中に隠す練習をしたりと、「良き手品師たるべく」努力は怠つていないので、キセ氏はそれで良しとしていた。

入店から数ヶ月の後、メイコさんはやつと一つ、トランプの手品を披露できるようになった。キセ氏と比べればまだますが、ぎりぎり合格ラインといったところだ。

常連客はメイコさんのぎこちない手つきやおかしな口上ををからかいながらも、自分の選んだカードを当てられた時には大喜びで拍手喝采した。メイコさんは花が咲いたように笑つて大はしゃぎした。キセ氏も負けてはいない。本人曰く「古い始めた脳みそにムチ打つて」メイコさんのレシピブックを読み、順々にカクテルを覚えていった。粉雪が舞い散る頃には、分厚いメニューの中身をすべて覚えたとは言わないが、少なくともメイコさんが休んだ時の代打は充分勤められるようになっていた。

「叔父さんも、良きバーテンダーたるべく、努力してますね」

キセ氏作のダイキリを試飲しながら、お酒の先生・メイコさんは頷

く。キセ氏も眉をひょいと上げ、得意な顔で頷く。

脳までとろける暑い夏に結成したキセ氏とメイロさんのコンビは、トンボが飛ぶようになつても、木の葉が色づいても、町がイルミネーションに華やいでも、桜が咲いても散つても、変わることなく常にカウンターの向こうにあつた。

そうして、慈雨の季節が過ぎ、いつの間にか町では、ヤマガけたたましく歌つようになつていた。

最後の客が蒸し暑さの残る夜の町に消えるまで見送つて、メイコさんは盛大に伸びをした。

「あー、疲れたあ。暑い」

「さっきまで、冷房が効きすぎて寒いって言つてたじゃないか

「そうですけど、外に出たらやつぱり暑かつたんですねん」

何なんでしょうね、夜になつてもこんなに暑いなんて異常だわ、と文句を言いながらメイコさんはエレベーターのボタンを押す。並んで4階まで上がると、メイコさんは仕掛け扉を慣れた手つきで難なく開けた。

店は閉まつても、一人にはやることがある。売り上げの計算、レジ閉め、簡単な掃除、そして、手品の練習だ。

「さ、それじゃあやうつか」

キセ氏はカウンターの向こうに回り、メイコさんはその前に座る。カウンターの内側から紙とペン、灰皿、マッチを取り出し、何をするのかと田を輝かせているメイコさんの前に並べた。

「今から教えるのは、心を読む方法だよ」

言いながら、キセ氏はメイコさんに紙とペンを差し出す。

「ここに、私に言いたいことを書いて欲しい。給料上げるとか、休みをよこせとか、何でもいいよ。口では言いつくことつてあるだろうから。ただし、心からの声でないと駄目だ」

キセ氏はぐるりと後ろを向いた。リキュールボトルと対面しながら、背中の向こうでメイコさんが少し悩み、やがて何かを書き付け始めたのを聞いていた。

しづらしくして、

「書きましたよ」

とこう涼しげな声が聞こえる。

「じゃあ、それを私に見えないように、文字を内側にして折りたた

んで。なるべく小さくな

紙を折る密やかな音のあと、声をかけられて、よつやくキセ氏は前を向いた。メイコさんはほつそりした指先に、数センチ四方に折った小さな紙を摘んでいた。

それを受け取り、キセ氏は灯りにかざして中の文字が透けないとを確認する。

「見えないね？」

「はい」

「では」

キセ氏は灰皿を手元に寄せると、紙を小ちく破り始めた。

1回、2回、3回。

手の中で重ねながら、幾度も紙をちぎる。その様子をメイコさんは息をつめてじっと見つめる。

破り終えた紙を灰皿の中に入れると、キセ氏はマッチを1本擦つた。つんと鼻を突く臭いと同時に炎があがる。キセ氏は確かめるようにメイコさんの前で軽く振つて見せると、それを灰皿の中に放り込んだ。

「あ」

メイコさんがぽかんと見ているうちに、火は紙を舐め、すぐに大きな炎となつた。

キセ氏はその上に右手をかざし、すつと皿を閉じる。

「この炎から、書いてもらつた文字、君の心の声を読み取るう」
それまで食い入るように灰皿を見つめていたメイコさんは、え?
と視線をキセ氏に転じ、思わず息を呑んだ。

白いシャツの手首をきちんと留め黒いベストを着たキセ氏は、いつもの穏やかな表情から一転、下がり気味の眉をしかめ、厳かな顔をしていた。かざした右手が、ゆっくりと、幾度も灰皿の上を行き来する。

炎の声を聞こえといふよ。アヒル

メイコさんの心の声を聞こえといふよ。アヒル

そこにいたのは、今までに奇跡を呼び起しかんとする、一人の魔術師だつた。

メイコさんは、息をするのも忘れていた。

しばらくして、キセ氏は、ふと皿を開け、右手を下ろした。灰皿の中では、まだ炎が小さくなりながらも揺らめいている。メイコさんもふう、と息を吐いた。張り詰めていた空気が緩んだ。

「叔父さん、私の書いたこと、分かった？」

メイコさんはさやくようになつと口を開く。キセ氏はいつも落ち着いた声で、

「ああ、炎から伝わつたよ」

と頷きながらも、不思議そうな顔をする。

メイコさんは厚い唇に静かな笑みを浮かべた。
『じめんなさい』

二人は同時に口にした。

それこそ、メイコさんがキセ氏に伝えたいことだった。

「別に、謝られるようなことはないと思つけど……」

「だつて、私、ご迷惑おかげしてますから。いきなり押しかけて雇えなんてお願いしたし、手品は相変わらず落ちこぼれだし。きっとこれからも叔父さんを困らせます」

「いやいや

「なあんだ

キセ氏は灰皿に少量の水をかけながら首を振る。

「私は充分助けられているよ。おかげでずいぶんとバーらしくなつたし、お客様も増えた」

湿らせた灰を拭うと、キセ氏は穏やかな笑みを浮かべて灰皿をカウンター上に戻した。

キセ氏がタネを明かすと、メイコさんは、

「なあんだ

と少しがつかりしたようだつた。

「本当に心を読んだのかと思ったのに」

「そりゃ手品なんだから、タネも仕掛けもあるよ

手品師の弟子らしからぬメイコさんのリアクションに、キセ氏は苦笑してしまう。

「それでも、タネを知らない人にとっては読心術なんだからさ、次はそつちの番、と道具一式をメイコさんの方へ寄せる。キセ氏に指導されながら、メイコさんは^{まきこ}いちない手つきで練習を始めた。

時折、

「その破り方だと、文字を読んだり見える」

「紙を落とすとき、なるべく文字が表にならないように気をつけて」といった指摘をされ、その度にメイコさんは額いてやり直す。灰皿に積もった紙の山を捨て、そこに新たな紙をちぎり入れ、それが積もって再び山となる。

うだるような夏の夜の底で、手品師とその弟子は静かに、しかし熱を帯びながら、秘密めいた儀式のように幾度も同じことを繰り返す。

遠くに響いていた電車の音も、いつの間にか聞こえなくなつた。いつしか、かなりの時間が過ぎていた。

「もう、これくらいにしようか」

時計を見ながら、キセ氏は練習の終了を宣言した。メイコさんはふう、と息をつき、指先をこすり合わせる。

「紙の破りすぎで手が痛いです」

「ずいぶんやつたからね」

キセ氏は手元のメモパッドをぱらぱらとめくる。買つたばかりなのに、すでに紙の半分近くはメイコさんの犠牲になつていた。

「まあ、でも、良い手品だから。覚えておくといいよ」

マッチ、紙、ペンを一まとめに片付け、水でゆすいだ灰皿をペーパータオルで拭ぐ。メイコさんは、うーんと伸びをしながら頷いた。

「確かに、インパクトもある手品ですよね」

「インパクトも大事だけど」

「大事だけど?」

カウンターの下にしゃがみ込んで灰皿を戻し、ひょい、と顔を上げると、カウンターに身を乗り出してマイコさんがこちらを覗き込んでいる。

キセ氏はシンクに手を置いて身を起こし、気障っぽいことを言つようだけど、と前置きをした。

「親子だって恋人同士だって、お互いの心の中を知ることはできない。人の気持ちを理解するのは難しいし、きっと本当に深いところまで分かり合う事はできないだろう。でも、この手品じゃ心が通じる。分かってもらえたって気になれるんだよ。例えタネがあつたとしてもね。それって、素敵なことだと思うんだ」

少し照れくさげなキセ氏の言葉に、マイコさんはふふつ、と笑う。「そうですね。叔父さんにも、私の心は伝わったし」

目を伏せたその表情がどこか寂しげに見え、キセ氏は少し驚いた。マイコさんの瞳はカウンターではなく、その向こうの、彼女にしか見えない何かを見ているようだった。

だが、それもほんのわずかな間のことと、次の瞬間にマイコさんはぱつと顔を上げ、笑顔で腕まくりをした。

「さ、それじゃ片付けしましょっか」

いつもの通りの、元気なマイコさんだ。

キセ氏は頷き、事務所の掃除用具入れに向かった。先ほどの憂いを秘めた眼差しが気になりつつも、きっと薄暗い店の照明のせいだろうと結論付け、モップと塵取りを取り出した。

一人で手分けして店内を片付け、売り上げの処理をしてレジを閉め終わつた時には既に未明と呼ばれる時刻になつていた。キセ氏はふう、と息をつくと、売上金を夜間金庫用の袋にします。マイコさんが来てから店の売り上げは右肩上がりで、袋はなんとか立体的な姿を保てるようになつていて。今までも決して悪くはなかつたが、歴代の売り上げ最高記録を毎日のようにたたき出しているのだからすごいものである。もしかすると、マイコさんは招き猫が化けてい

るのかもしれない。

事務所から鞄を取り出し、キセ氏は着替えを済ませたメイコさんは声をかけた。

「じゃあ、帰ろうか

「あ、叔父さん」

メイコさんはショルダーバッグをぽん、とカウンターに放った。

「私、もつときのやつ、もつちゅうと練習してきます」

「え？」

「家でやつてもいいんですけど、集中できないから。ここでもやつた

いんです」

いいですか？と一応訊くものの、メイコさんは居残り練習をする気満々でカウンターの内側に入り込み、灰皿を取り出している。

今までもこつやつてメイコさんが「自主練」と称して残つたことは何度かあった。店の戸締りを任せても問題はなかつたし、キセ氏が体調不良で早退した時は、夜間金庫への預けをお願いしたことだつてある。メイコさん一人を残すことにして、キセ氏は何の不安もなかつた。

唯一心配なのは帰り道だが、メイコさんはタクシーを使つから大丈夫だと言つ。

「ついでに夜間金庫にも行つてきますよ。叔父さんが一人で歩いて行くより、私がタクシーで寄り道するほうが安心でしょ」

それもそうだ。キセ氏は頷いて、夜間金庫の袋と店の鍵をメイコさんに預けた。

「明日は休みだけど、鍵大丈夫？」

「平気です、ちゃんと預かりますよ」

「色々付いてるから、気をつけてね」

「分かつてますって」

おかしそうに笑つてメイコさんは鍵をうちうちやうやうと揺らす。それがバッグの中にしまわれたことを確認し、キセ氏は頷いて扉を開けた。

「じゃ、あまり遅くならなによつて元気よ

「はい。おやすみなさい」

メイコさんは手を振る。キセ氏は右手を上げてそれに応え、店を出た。閉まりかける扉の細い隙間から、メイコさんの笑顔が見えた。

それが、最後だった。

一日後、店に出たキセ氏は扉が施錠されていない事に驚き、慌てて店内に飛び込んだ。しんと静まりかえった店はきちんと併付いていたが、酒屋などへの支払い金を入れていた金庫は空っぽの中身を寒々と晒していた。カウンターの上には、白い紙が一枚残されており、飛ばないよう鍵で重石がされていた。

キセ氏は震える手でメモを拾い上げた。

「めんなさい

流れるようなメイコさんの字だった。

むつと空氣のこもった店の中に、キセ氏は呆然と立ちつくしていった。

その日、いくら待つてもメイコさんは現れなかつた。
売上金と、金庫内のお金と共に、メイコさんはキセ氏の前から姿を消した。

キセ氏はメイコさんのことを警察に通報しなかつた。無くなつた額は決して少なくはなかつたが、幸いこのところ売り上げが良かつたこともあって、結構な金額がストックしてあつたのだ。店の経営にすぐに困ることもない。

それに、キセ氏はメイコさんをメイコさんだった女性を、糾弾したくなかった。そんなことをした所で、どうにもならないと思つていた。

ただ、喪失感だけはどうしようもなかつた。メイコさんのことなく

なった店は灯りが消えたようで、キセ氏は通夜の席にいる気分だつた。一年前まではこれが当たり前だつたということが信じられない。あの明るい笑顔なしで、自分はどうやつていたのだろう。

それでも、きっと慣れてしまうのだろうとキセ氏は思った。突然現れたメイコさんが、いつしかいて当たり前の存在になつたよう。彼女のいない寂しさにも、すぐに慣れる。

常連客には、メイコさんは実家の都合で帰ることになつたと伝えた。どの客も残念そうに顔をしかめ、

「寂しくなるね」

と口々に言つた。中には、

「俺、今度メイコちゃんに一周年祝いのプレゼント持つて来ようと思つてたんだ」「キセ氏に打ち明ける人もいた。

メイコさんは、店の顔として愛されていたのだ。

メイコさんを惜しむ数々の言葉に、キセ氏はいつもの通りに穏やかに笑つて、

「今度会つたら、伝えておきます」と応えた。

その機会がいつ訪れるかは分からぬ。普通に考えれば、メイコさんが戻つてくることは一度とないのだから。

それでも、キセ氏は「今度会つたら」という文句を使つた。「ワン・ツー・スリー」という手品の決まり文句のよう、思いを込めて。

今度会つたら。

会えることがあるならば。

閉店した店の中で、キセ氏は独り、レジを叩いていた。

ピッピ、という軽やかな電子音の合間に、風の音が聞こえる。天気予報では、今日のこの北風が木枯らし1号だと言っていた。古いビルを揺らすように、強風は容赦なく吹き付けている。

この分では、外はかなり寒いのだろうとキセ氏はぼんやり思った。コートを着てきたほうが良かつたかもしない。厚着だから大丈夫だろうと、置いてきてしまったが。

レジを閉め、キセ氏はうんと伸びをする。売上金を鞄の中にしまいこみ、店の鍵を手に取る。今日の業務はこれでおしまいだ。

鞄を抱え、椅子から立ち上がった時だつた。

唐突に、インター ホンが鳴つた。

思わずびくっと肩をあげてしまった自分を恥じつつも、キセ氏はすぐにはインター ホンを取らなかつた。閉店の看板は扉の前に掲げてある。時間も時間だし、普通の客であれば、それを見てわざわざ入店しようと試みるはずがない。

物騒な客か、単なる醉客のいたずらか、それとも晩秋の幽霊か。キセ氏は店の中でじっと息を殺していた。

再び、ピンポン、と電子音が鳴つた。

意を決し、キセ氏はそつとインター ホンに近づき、静かに受話器を取つた。

「はい」

「……開けて」

受話器の向こうから小さな声が聞こえる。キセ氏の胸は大きく波打つた。聞き覚えのある声だつた。

受話器を置き、鍵を外して取つ手を掴み静かに扉を開いた。入り口に立っていた人物は、ふらりと揺れながら、キセ氏にぶつかるようにして入ってきた。

マイコさんだった。

ふらふらと不安定に揺れる体を慌てて支え、キセ氏はマイコさんはそのままテーブルに突つ伏し、しばらく動かなかった。

「大丈夫？」

キセ氏が声をかけると、

「お水」

くぐもった声が返る。キセ氏はコップに水を入れ、彼女の前に置いた。マイコさんは顔を上げ、覚束ない手つきでコップを掴むと勢い良く飲んだ。

数ヶ月ぶりに会ったマイコさんは、あの時とは別人のようだった。美しかった瞳には力がなく、目の中にはクマができる。顔色が悪く、肌はぱさぱさと荒れており、疲れているのが一目で分かる。どこかでかなり飲んできたようで、マイコさんの吐く息からはきついお酒の臭いがした。キセ氏はカウンターからティキヤンタを取り出して水を満たし、マイコさんの傍に置いた。

俯いたまま、マイコさんは返事をしない。

ここを出た後マイコさんが何をしていたのか、あのお金をどうしたのか、キセ氏は訊かなかつた。ただ、時折彼女が発する、何なによあの男、だの、裏切り者、だのという弦までおぼろげに事情を理解した。

キセ氏はマイコさんの向かいに黙つて座つていた。
店の中には木枯らしの吹く音だけが響いていた。

しばらくして、マイコさんはむくつと起き上がり、水を飲んだ。
とろんとした目つきでコップを置き、空を睨む。その視線がゆっくりと降りて、キセ氏の目とぶつかった。

マイコさんは、ふつ、と笑つた。

「通報しないの」

キセ氏はゆつくつと首を横に振る。

「へーえ

馬鹿にしたよ！」メイコさんは幾度も頷く。

「何で？あたしに恩売るつもり？それとも見逃す代わりにあんたに何かしらうつての？」

お酒に掠れた声で畳み掛けの口調は荒く、顔には歪んだ笑みが貼りついている。キセ氏はすっと目を閉じた。真っ赤に潤んだ目をしながら悪態をつく彼女に、なんと言葉をかけて良いか分からなかつた。

「違うよ」

息を吸い、目を開けて、まっすぐメイコさんを見つめる。アーモンド形の瞳が少しだけじろいだように揺らいだ。

動搖を隠すように、メイコさんはふん、と鼻で笑つた。

「そうよね、あんたも悪いもんね。どこの誰とも知れない女の嘘を信じて、雇つたんだから」

馬鹿みたい、いい歳して騙されて、と吐き捨てる。

キセ氏は静かにメイコさんを見つめた。下がり気味の眉のせいで、その表情は泣いてるように見えた。

「君が本当の姪じゃないことは、知つていたよ」

穏やかな言葉に、メイコさんの顔から拭い去つたように笑みが消えた。

「どういづ」と

すっと首をもたげ蛇のように睨みつける。そのままを見返しながら、キセ氏はゆつくりと口を開いた。

「最初は、本当に本物なのかと思つたけれどね。話すうちに違うんだろうなと気づいた。まあ、理由はないし、勘みたいなものだけれど」

兄との確執など、身内しか知りえない話を知つているメイコさんを、しばらくの間キセ氏は信用していた。だが、それもほんの少しのことだ。話すうちに、小さな齟齬や曖昧な記憶が出始め、キセ氏はおやつと思つた。

後ろ暗い連中との付き合いがありそうな彼女のこと、キセ氏の身辺調査などあつといふ間だったに違いない。大まかな事情を掴んだ

後は適当に話を合わせ、姪に成りますつもりだったのだろう。

「ただ、さすがに小さな事、幾度も見せた手品や、いつも選んでいたカードなど、までは、調べ切れなかつたのだろう。そんな小さなほころびがキセ氏の中で違和感として残つたのだ。

「……さすがに今回みたいなのは、あたしも無茶してるとは思つてたわよ。上手くいけばラッキーくらいに考えてた」

メイコさんは静かに呟いた。

「でも、ここみみたいに個人でやつてて、店主の周りにあたしが成りすませる人間がいて、そこそこ儲けてるところなんてなかつたから」要するに、入り込みやすい店だったということだ。「今回みたいのは」と言つて葉にメイコさんの辿ってきた暗い道を感じ、キセ氏は胸が締め付けられる思いがした。

「ここのことば、どうやつて？」

彼女は、有名な酒販会社が運営するバー紹介サイトの名を口にした。「あんた、前に取材されてたでしょ。気をつけなさいよ、どんなやつが見てるか、分かつたもんじゃないんだから」「あたしが言つことじやないけどさ、と笑う。

キセ氏が取材を受けたのは一年半前のことと、そのページはプリントアウトして、事務所のファイルに大事に取つてある。記事をきっかけに常連になつてくれた客もいるが、まさか違う意味で目をつけていた人間がいたとは。あけすけな物言いにキセ氏も思わず苦笑してしまつた。

あはは、と場違いに明るい声で一しきり笑つたかと思うと、メイコさんはその余韻を断ち切るようにすっと息を吸い、真顔になつた。「なんで追い出さなかつたのよ。偽者だつて分かつてたんでしょ」知つてたんでしょ、詐欺だつて。

鋭く切りつける声を、キセ氏は静かに受け止める。

「何でだらうね」

テーブルの上で手を組み、胸の内に沈んでいる思いを掬い上げるよう俯いて目をつぶる。メイコさんは厳しい顔でキセ氏を睨みつけ

ていた。答え次第ではいぐらでも罵倒できるよつ、胸のうちに沢山の言葉を用意していた。

窓の外からは風音が聞こえる。

木枯らしの吹き荒れる中、しんと静まる店内で2人は身じろぎもしなかつた。

やがて顔を上げたキセ氏の口には、微かな笑みが浮かんでいた。

「騙されてもいいって、思ったのかな」

マイコさんは訝しげに目を細める。

「どうより、騙されたかったのかもしれない」

「何よ、それ」

「私には血の繋がった肉親がいて、一緒に店を切り盛りしている。親しく助け合っている。嘘でもいい、たつた一時でもいいから、そう信じたかったのかな。そういう夢を見たかったんだろうな」キセ氏はふふつ、と静かに笑う。自分でもおかしくてたまらない、と言つよつに。

マイコさんは目を伏せた。予想しなかつた答えとキセ氏の齧つた笑みに戸惑い、どう応えて良いか分からなかつた。

二人は俯き、それぞれの手元だけを見つめていた。

「……馬鹿みたい」

マイコさんが顔を上げた。

「バツカじやないの、そんなつまんないことだ」

言葉に反して口調は弱々しく、微かに震えている。伏せられた目はせわしなく動くもののキセ氏を見ることは無い。

虚勢を張るマイコさんに、キセ氏はそつと呴く。

「君はそつ思つかもしれない。君はまだ若く、氣力もあるだろ? つか

けれどね、とキセ氏はマイコさんの目を覗き込み、笑つた。

「独りで生きるのは、寂しいものだよ」

朝日が昇り、田覚め、誰もいない家で取る朝食。話す相手もいないままで迎える毎。店に出て、ほんの少しの時間客と交わす会話の

心地よさ。そして、暗く静まり返った部屋に灯りを点す時の静けさ。店がなければ、誰とも言葉を交わさずに一日が終わる。

自分など、いともいなくとも変わらないのではないかと、ふと感じた。

その途方も無いやるせなさ。

「……」

メイコさんは何も言えなかつた。きゅっと固く結ばれた唇が微かに震えていた。

「タネがばれれば、手品はただのペテンになる。けれども、信じている人にとっては、それは紛れも無い奇跡なんだよ」

ゆづくつと、言い聞かせるようにキセ氏は言葉を続ける。ひざの上に手を置き、俯いてじつと目を閉じるメイコさんに向けて語りかける。

「君は立派な手品師だつた。私に、お客様に、この店に、素敵な奇跡を見てくれた。だから私は、君のことを胸を張つて断言できる」

温かな眼差しが、柔らかな声が、メイコさんを包み込む。

「この私の、手品師キセの姪だと」

テーブルの向こうで俯くメイコさんの表情は見えない。けれども、キセ氏はメイコさんの強張つた肩から、ふつと力が抜けたのを感じた。

メイコさんは、ゆづくつと顔を上げた。潤んだ瞳からは歪んだ色が消えて、静かな湖面を思わせる黒に透き通っていた。

「……あたしもね、ちょっとだけ、本気になつてた」

震える唇を静かに解く。キセ氏は頷きながらメイコさんを見る。

「あいつが色々調べて、この店なら楽勝だつて言つてさ。あたしもその気になつて、ここに入つて。一ヶ月もいればいいつて思つてた。あんたにつまること取り入つて、金さえ手に入れればすぐに逃げ出せるつて」

でも、違つた、と掠れた声で小さく笑う。

「なんかさ、お姉さんと話したり、お酒作ったり、手品するのが、すごく樂しくて……けどさ、本当のあたしさ、あんたとはなんの縁も無い、ただの馬鹿な女だからさ。それを忘れるなんて都合いいこと、しちゃいけなかつた

「だから、出て行つた？」

メイコさんは頷く。長い髪がさらりと前に流れ片目を隠したが、それも直さず彼女は続ける。

「あたしはここにいちゃこけないって思つた。それであいつのところに帰つた。けど、もうそこにもいられなくなつちやつた」

結局あたし、ただの金づるだつたみたい、と乾いた声で笑う。

本当に居場所の無くなつたメイコさんは、ふらふらと酒を飲み歩いて、いつの間にかこの古ビルにたどり着いていた。普通なら絶対に騙した相手の下に戻ることなどないのに、気がつけば店の前にいたのだという。

なんでかな、とメイコさんは呟いた。何で、何でだら、と口元を問いただす。問い幾度も呟いた。

「許してもらえるわけ無いのにね。騙された者同士、一緒にいたつて仕方ないのにね」

柔らかな陰がメイコさんの顔を縁取る。何も見ない目で、空に向かい、メイコさんはふつと静かに笑つた。

「あたしも、信じたかったのかな」

不意に、キセ氏は立ち上がり、すっと右手を差し出した。

「さあ、ここには不思議なトランプがある。正直者にも不届き物にも、誰の目にも見えない、不思議なトランプ。これより、奇跡をお金にかけましょう」

静まり返つた店の中に、キセ氏の朗々とした口上が響く。優しい顔立ちからは想像もできないよく通る声に、メイコさんは思わずびっくりして顔を上げた。

田の前にすつと立つキセ氏は堂々と胸を張り、ぴんと背筋を伸ば

している。やうしていると意外と背が高い「う」に、今更のようにはメイコさんは気づいた。

力強い笑顔で、キセ氏は見えないトランプを両手で広げ持ち、呆気に取られるメイコさんにそれを差し出す。

「さあ、一枚選んで」

戸惑いながらも、メイコさんは一枚引く仕草をする。キセ氏は丸屈がかった仕草で眉を上げ、

「そのカードでいいんだね？」

確認し、

「では、そのカードを覚えて」

強く、心に念じて！

言いながら、見えないトランプを切る。

突然のことなどうして良いか分からなかつたが、メイコさんは言われるままに一つの絵柄を思い浮かべた。

「……覚えた」

頷くと、キセ氏は透明なトランプを扇形に広げる。

「この中の好きな場所に、そのカードを差し込んで」

メイコさんは、見えないカードを指でつまみ、そつと扇の中に戻す。キセ氏はカードの山を整えると、それを二つに分け、重ね、また二つに分け、と素早くシャッフルし、滑らかな手つきで混ぜていった。

やがて、キセ氏は静かな手つきでトランプをテーブルに置いた。そしておもむろにカウンターの裏に回りこみ、下から何かを取り出した。

古いポラロイドカメラがメイコさんの目の前に現れた。

「さあ、さつきのカード、覚えているね？」

メイコさんは頷く。キセ氏は、よろしい、と透明なトランプを、位置を違わずすっと持ち上げ、一枚引き抜いた。続いて胸ポケットから見えない何かを取り出し、上部を掴んで引っ張る仕草をする。

「透明なペンだよ」

言いながら、キセ氏はカードに何かを書くように手を動かし、透明なキャップを閉め、再び胸ポケットに手をやつた。見えないカードに見えないペンで見えない文字を書き、キセ氏はそれをメイコさんの前に置くように手を出した。

「さつき君が選んだカードにね、私からのメッセージを書いておいたから」

「見えるわけないじゃない。そんなもの無いんだから」

キセ氏は笑つて首を横に振る。そして、ゆつくりとした手つきでボラロイドカメラを持ち上げ、メイコさんに向ける。

「額に手を当てて、さつきのカードを強く思い出して」

「……」

「さあ。君が信じてくれれば、見えないカードは姿を現す」

メイコさんは、そつと右手を額に当てた。目を閉じ、先ほど選んだカードを思い浮かべた。

赤く輝く柔らかな心の形。

遠い昔の少女が好んだ数字。

パチッ、と軽い音がした。

メイコさんが目を開けると、目の前のカメラから写真が吐き出されていた。キセ氏はそれを手に取り、テーブルの上に置く。2人が見守る中、薄灰色の艶やかな紙に、段々と像が浮かび上がってくる。

薄暗い店内。壁にかかる装飾用のランプ。木でできた仕掛け扉。瞳を閉じ一心に念じるメイコさん。

その頭の上には、宙に浮かぶカード

メイコさんはぱつと写真を手に取り、食い入るように見つめた。

自分の頭上にくつ毛りと写るのは紛れもなく見えないトランプの中から選んだ、メイコさんの心の中のカードだった。

ハートのフ。

その空白部分には、黒い文字が描かれている。

小さなその文字を、メイコさんは目を近づけて必死に読み取った。

「あ……」

文字の羅列が意味を成した途端、メイコさんは一言も発することができなくなつた。胸の奥に温かなものが広がり、塊となつてぐつとこみ上げる。それは涙に変わつて、猫を思わせる美しい瞳から大粒の真珠を連ねたようにいくつも零れ落ちた。

メイコさんは写真をテーブルに置き、両手で顔を覆つた。

「ね、奇跡は起こつただろ？」

メイコさんは幾度も幾度も頷いた。

幼子のようにしゃくりあげるその華奢な肩を、キセ氏は優しく叩いた。

風音が静かに店の中に入り込み、寄り添つ二人の周りで柔らかな声のように響いていた。

誰かに職業を訊かれると、キセ氏は必ず、「人を騙す仕事です」と言う。

言われた方はたいていの場合キセ氏が冗談を言つて居ると思つて笑うか、真意を汲み取りかねて曖昧に笑うか、まじまじと彼の顔を見る。たまに真顔で詐欺師ですかと問う人もいる。

「ああ、マジシャンですか」

と頷いてくれるのは、ごく一部の勘の冴えた人だけだ。

分からぬ人には自分から正体を明かすが、キセ氏はいつも、「手品師です」

と控えめに言う事にしていた。「マジシャン」なんて呼び名、何だか大げさじゃないか。

遠くになだかな山々が青く霞む町の、繁華街の外れ。古いビルの4階にキセ氏の店はある。

5席のカウンターと3つのテーブル席がひしめく小さなバーはひとつそりと物静かながらもどこか温かな佇まい、キセ氏の人柄をそのまま反映したかのようだ。

来店する客は常連もいれば噂を聞いた新参者もいて、老いも若きも止まり木の鳥みたいに肩を寄せ合い、カウンターに腰掛けている。そのお皿当ては2つ。

1つは、キセ氏の若き姪、メイ「さんの作るカクテル。

秘密の薬のように立ち並ぶリキュールやジュースは、明るくお喋りするメイコさんの手の中で鮮やかに混ぜ合わされる。魔術のような手つきにお客が見とれているうちに、あっという間に、見田よろしく味も良い、素敵な飲み物が出来上がる。

そしてもう1つが、キセ氏の手品。

ぱつと見は優しげながらもどこか頼りない風貌のキセ氏が、その

両手を駆使するとあら不思議。カードは宙を舞い、心の奥底の思いは読み取られ、見えないものが立ち現れる。奇跡としか呼べない不思議な出来事が次々に起る。

お客様はメイコさんのカクテルに酔いしれ、キセ氏の手品に酔いしれ、そして日々に呟く。

「なんて素敵！なんて不思議！」

その度に、店主とその姪は2人して顔を見合わせ、にっこり笑い、お客様にお辞儀をするのだ。

メイコさんはキセ氏の弟子でもあるので、たまに手品を披露することもある。腕はまだまだで、時にはタネがばれそうになつて慌てる、

「続きは叔父さん！」

と無理やりキセ氏にバトンタッチする事もある。キセ氏は苦笑して、それでも鮮やかに代役をこなす。メイコさんは美しい瞳を見開いてじっと見つめ、いつだつてお客様と一緒になつて大喜びする。

夜の底にひつそりと佇む小さなバーで、手品師と、手品師の姪は、奇跡を生み出している。

ささやかで、美しい、驚きと喜びを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8171p/>

手品師の姪

2011年7月18日14時04分発行